



ここに泉あり

才尾弘太郎

ランプ生活と都会の間

世は高度経済成長の時代だといふ。しかしそれがすべての産業に共通しているのならば、農村の若人が都会へと出ていかなくともいいはずではないか。農村に青年が少ないのはこの地方も同じ現象だと私は思っている。

たしかに現在の農業は苦しい。誰だって安楽な人生を送りたい。かといって現実の苦しい農業に、将来の希望がないと決めつけてしまっているものだろうか。農業改善の余地がのこされているからこそ苦しいのであり、この現実を明るく楽しいものにする努力、これこそが現在の

農村青年に課せられた使命だと信じている。私もかつて都会にあこがれていた。いうまでもなく土に生きる自信も夢もなく、ただ慢然と農業に従事していた。めざましい産業、文化の発展とは逆に、私の胸中は苦しさ、淋しさがつのる一方だった。文化生活とは程遠いランプ生活を送っていることも、都会への憧れをかきたてていたのかも知れない。

陽の当たらぬ谷間で

私の住んでいるところは、山間のへき地で交通の便は悪く、収穫した作物も人間が運ぶのはかない。田地こそ一町歩あまりあるが、山間地特有の棚田で、その枚数は百をはるかに越え、一枚当りの平均面積は一アールにも満たない。農作業も機械はもちろん、牛馬でさえも満足に仕事ができず人力に頼っている有様で、労力は必要以上にかかり、収量はそれに反比例するといった具合である。

こんな環境だから、電灯がつかない、機械があっても村からは若者が去ってゆき、この頃では農家にいる嫁もないという状態である。私はたまらない気持ちになり家を出たくて胸がいっぱいであった。

しかし、人間は自分の力で生活し、労働の苦しさとよろこびをくりかえすうちに次第に大人になっていくものだと思う。私の場合、都会に出た方が利口だったかもしれないが、いつの頃からか、明るい生活は都会にだけあるものだろうか

と考えるようになった。もしそうだったら私も一刻も早く都会に出よう。

米と粟といったけど

しかし、私はこういった苦しい農業であっても、薄暗いランプ生活であって、しっかりと土に根をおろし、常に研究、改善に努力していけば、必ず農業でなければ味わぬぬるぬる楽しい生活が築けるものと確信している。

現在の私は、自分の理想に向って計画を一步一步前進させている。山間地なりに、これを利用して農業に目を開いた。それは米作にあわせ、粟といっただけの栽培であった。これで将来は七ヶタ農業も夢ではないという見通しがつきそうになった。これこそ私の生きる道であった。

その頃、やはり私も機械がほしくなり、機械を入れれば仕事が楽になって近代的な営農に見えるといった外面的なことはかりに気をとられていた。しかしその後、確かに仕事は楽になっても、所得はふえないということに気づき、所得がふえなければ農業近代化にはならないことがわかった。私は機械を買うつもりで土地を買うことに決めた。母も快く賛成してくれた。

根ツ子のように強く

わが家にとっては大金だったが、幸い裏山に一町歩手に入れることができた。土地は買っても、直ぐには現金収入にならないので今の生活は非常に苦しい。し



阿蘇の草原に挑む

— 阿蘇農校の酪農活動 —

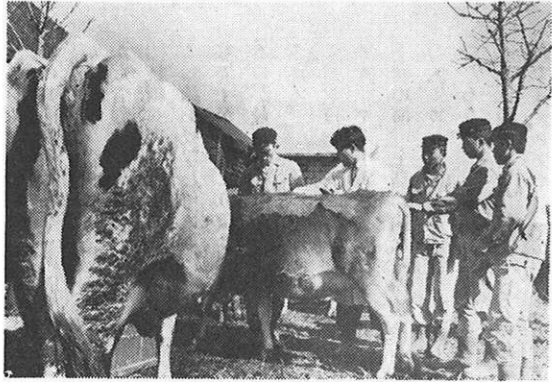
「愛の獣血運動」で有名になった、阿蘇農校は今年も二百名の卒業生を社会へ送り出す。その中、五十名は自営農業者として、新しい農業経営と取り組もうとしている。

阿蘇農高では、地域的にも特殊な条件にあり阿蘇総合開発という大きな目標のもとに、牧野改良、畜産振興、酪農問題等「明日の阿蘇」を目標とした研究や指導が行なわれている。

そのためグループ活動も活発である。例えば、農業科では、養鶏、乳牛の管理（飼料計算、作付、栄養管理）の学習や、牛乳検査、家畜検査の研究もかなり活発に行なわれている。こういったグループ活動の延長としての、論文発表もなかなか熱が入っており、学習活動の成果がうかがわれる。

注目された渡辺君の論文

今年の論文で特選になった渡辺靖昭君の論文は、〃思われた、六万町歩の阿蘇の大草原は草地改良と、酪農改善による大規模開発がなされなければならない。そのためには、産業基盤、特に道路の整備が第一の条件である。そして現在の谷内酪農は、もつと広大な原野に進出すべきだろう〃と本質的な



家畜の手入れの実習風景（阿蘇農校）

面を指摘している。渡辺君は、ことし卒業と同時に、まず、父親の同意を得て、水田を中心にした営農を進めながら、受入態勢をつくり計画的に乳牛、肉牛を導入するのだと張り切っている。

合言葉は〃外輪山へ登ろう〃

ところで、阿蘇農校では、毎年の行事として、高冷地酪農（長野県八ヶ岳）研修生を派遣している。これは営農、立地条件ともに共通性のあるこの研修で、毎年貴重な実績をものにしていく。

さらに、阿蘇農校では現在、酪農実習のパイロット基地ともいえるべき四十町歩の放牧場を、外輪山の上に設ける計画が

ある。これからの阿蘇酪農は、外輪山に進出すべきだという、いわば橋頭堡的な意義がこめられているようである。ところで、いま、校内で〃外輪山へ登



防風林の手入れをする菅原君

腕一本でひらいた一ターク

— 荒れ山にかけた青年の記録 —

熊本県農業コンクール、農業新人王部門でみごと知事賞を獲得した菅原武義君（本渡市下浦・二十六才）をたずねてみた。

市とはいえ、本渡の中心街から十二詰。下浦の南海岸は、真珠の養殖棚が美しいパターンをみせている。しかし、耕地と呼べるものは無数の入江のどんづまりに、それこそ握りの水田があるだけ。標高こそないが、山また山が海岸まで張り出している。

ろう〃という合言葉が叫ばれている。いみじくも、明日の阿蘇を創ろうとする逞ましい姿勢と、新しいエネルギーを感じさせる合言葉ではある。（K）

昭和三十一年ひとりの菅原君が天草農高を卒業すると、待ちかねたようにお父さんは農業の仕事を引き継ぐと、附近に盛んな石切りの仕事に専念しはじめた。その時の土地が、田七町、ミカン園三十町。ここから、菅原君のミカン園造成の計画がスタートした。まず未墾山林一畝を入手、苦しい開墾がはじめられた。手開墾のベースは知れたものである。ほんとうに遅々とした歩みであった。それでも二十町の開墾が完了した。三十三年、本渡でブルドーザーによる大規模な造成事業をみた。途端に、今までの手開墾がつくづく馬鹿らしくなったという。菅原君は、ミカン新植の気運の出で来た村中を懸命に説いて回った。共同でブル開墾をしようじゃないかと。部落の、それも年寄り、若者たちの間にはその考え方がかなりのギャップが